

# 遁走するオーウェル：『牧師の娘』における歴史、記憶、浮浪

秦 邦 生

## 1.

ジョージ・オーウェルの1930年代の小説のなかでも1935年の『牧師の娘』はとりわけ注目されることの少なかった作品だと言える。しばしばポストコロニアルの視点から関心を集める第一作『ビルマの日々』(1934)や、後の『動物農場』(1945)や『1984年』(1949)のような政治小説をある意味準備したともいえる『空気を吸いに』(1939)のような作品と比べれば、地方の教区牧師の独身娘の失踪物語は、オーウェルという政治的人格の思想的発展に照らして場違いかつマイナーな逸脱に思われるのかもしれない。結果、この小説の伝統的な評価は必ずしも高いとは言えない。すでに出版社との交渉段階からこの作品の問題点は指摘されてきた。各個の場面描写——不況下の田舎教区の息詰まる閉塞感、季節労働者たちの最低レベルの環境、ロンドンの浮浪者の溜まり場など——には才能の閃きがあるが、小説としては一貫性が無く断片的に過ぎる。これは主人公の記憶喪失による突然の失踪と放浪、そして未来への展望を欠いた父の牧師館への帰還という、明確なメッセージ性のない結末へと至る物語の筋の弱さへの批判でもあるだろう。ジョイスの『ユリシーズ』にならうトラファルガー広場の実験的な描写は単に悪しき模倣と見なされてきた<sup>2</sup>。この小説を作者が自伝的素材を消化せずに織り込んだパッチワークと見なして、伝記的な関心からのみ読むことすら可能である<sup>3</sup>。

こうした読解の伝統に対し本論で私が試みたいのは、1930年代の英国性を巡る文化政治の社会史を再構築しながら、オーウェルの『牧師の娘』をその特殊な文脈に差し戻すことである。以下ではまず、歴史意識と表象、記憶(喪失)、そして遁走/浮浪といった諸テーマに即して読解してゆくことで、表面的には英国内に留まるこの小説の物語が、実は当時の帝國的地平の変動と直接・間接に結びついている点を明らかにしたい。英国/帝国のダイナミズムの中に置きなおすことを通して、この小説に込められたオーウェルの問題意識がはじめて浮き彫りになるとともに、その射程と限界を正しく測定する機会が開かれるだろう<sup>4</sup>。

## 2.

まずはあらためて物語の粗筋を紹介することから始めよう。この小説は五部から成る。第一部では主人公ドロシー・ヘアの日常に焦点があてられる。ドロシーはサフォークの村の教区牧師である父のチャールズと二人暮らし、母の逝去の後は家計から教会の手伝いまで全てドロシーに重くのしかかっている。ある夏の日、特別に疲れたドロシーはただ一人友人とも言える中年のボヘミアン芸術家ウォーバートン氏に招待されるが、強引な誘惑を受け拒絶する。帰ってきたドロシーは日曜学校の劇の準備をしようとするが、疲労で眠りに落ちてしまう。第二部冒頭で眼を覚ましたドロシーは、突然ロンドンの裏通りに一人たたずんでいる。記憶をなくしたドロシーは、ノビーという浮浪者に誘われるままにケント州を目指し、季節労働者たちと一緒にホップ摘みの仕事にありつく。単純労働の毎日にドロシーは不安を忘れかけるが、窃盗を繰り返すノビーの逮捕、失踪をウォーバートンとの駆け落ちだと書きたてる新聞記事をきっかけに記憶を取り戻し、ホップの季節の終わりにともないロンドンに舞い戻る。第三部でドロシーは娼婦たちの定宿

にまぎれこみ、失業者のあふれる街で職探しを試み、ついに十数人の浮浪者たちとトラファルガー広場でホームレス生活を送るようになる。物乞いの罪で警察に拘留されたドロシーは、第四部で親戚であるトマス・ヘア卿に助け出され、ロンドン郊外の小さな私立女学校で教員として雇われる。はじめの数週間、ドロシーは教育に天職を見出すが、金だけが目当ての経営者ミセス・クリーヴィ、実利的な教育にしか関心のない親たちのためにドロシーの努力は挫かれ、結局は解雇されてしまう。第五部でようやく汚名が晴らされたドロシーは、信仰を失いこれまでの日常生活に意味を見出せずにいるが、それでも故郷の村へ帰ることを決意する。

はじめに注目したいのは、時間と歴史の主題が物語全体の枠組みとして働いている点である。“As the alarm clock on the chest of drawers exploded like a horrid little bomb of bell metal”<sup>5</sup>と、小説は冒頭の一行、ドロシーの目覚めの場面から、分刻みのルーティンに忙殺される彼女の日常を暗示する。信者の減り続ける地方の小教区には補助司祭を置く余裕も無く、結果として信者への慈善訪問から日曜学校の手伝いまで全てドロシーが引き受けねばならない。皮肉な対照は時を告げる教会の鐘楼が老朽化のために崩壊しかかっている事実に見られる (31-2)。近代における世俗化の進行、“all this Science and Free Thought” (65) による伝統教義の掘り崩しと神学における近代主義 (Modernism) の台頭など、信仰の喪失という筋もこうした歴史的な変遷の一環として読まれるべきだろう。しかしドロシーの父、ヘア司祭は貴族の末裔としての矜持にこだわるばかりで、現実に向背を向けている。“[H]e was an anachronism. He ought never to have been born in the modern world” (17)。この時代錯誤 (anachronism) は、彼の教義が“the old-fashioned High Anglicanism” (18) である事実、壁を飾るチャールズ1世の肖像版画 (14, 24)、ドロシーが日曜学校の演劇に準備している『チャールズ1世』という戯曲 (22) により繰り返し強調される。だが、“to live in past ages is very expensive” (17) とあるようにこうした逃避的な過去志向も逼迫する教会経営の現実にも脅かされている。“Here—in Sumatra Tin, United Celanese and numberless other remote and dimly imagined companies—was the central cause of the Rector’s money troubles. He was an inveterate gambler.” (26) とあるように、彼の関心は相続財産を海外・植民地の「良い投資」につき込むことばかりに向けられている。おりしも国会補欠選挙に向けた保守候補のキャンペーンが“Rule, Britannia”を奏でつつ、“Red”の脅威に対し“Empire” (35) を防衛する横断幕をひるがえしている場面が挿入されるが、一見無力で無害なヘア司祭の過去志向は、実はこうした同時代の帝国主義のイデオロギーと共犯関係にあると言えるだろう。

同じような時代錯誤の問題は第四部でも繰り返されている。ヘア司祭の依頼でドロシーをホームレス生活から助け出すトマス・ヘア卿は“the impression of having carefully disguised himself as a cavalry major of the 'nineties” (191)、ドロシーが日中匿われる屋敷の屋根裏部屋は“a sort of museum of bric-à-brac dating from 1880 onwards” (193) と描かれる。ドロシーが働くロンドン郊外の私立学校は、“so curiously antiquated—so reminiscent of those dreary little private schools that you read about in Victorian novel” (211)、さらに教材はいずれも19世紀後半に出版されたものをいまだに使い続けている。予想されるように、このような雰囲気の中で困難なのは歴史教育である。“[T]hese children came from bookless homes and from parents who would have laughed at the notion that the past has any meaning for the present” (221)。こうした過去との関係を断ち切られた意識は、習字や算術など実利的教育ばかりを重んじる下層中産階級の親たちの意向に沿って、機械的な教育を受けてきた結果である。学校に来てすぐ生徒たちの習熟度を測る質問をしたドロシーは、次のような驚くべき発見をする。“[T]hey knew nothing, absolutely nothing—nothing, nothing, nothing, like the Dadaist” (208)。一方には逃避的な過去志向、他方には「ダダイスト的な」過去への無知・無関心、そのどちらも結局は、問題的な現在への批判的距離を欠いた追認を生み出すばかりであろう。

小説中でのドロシーの意識的な行動は、まずこのように混乱した時間・歴史意識への挑戦として位置づけることができるだろう。教師としてドロシーは機械的な反復とコピーばかりの授業で曇らされた生徒たちの頭脳を刺激するため、「創造的」な授業を試みる。英国の州都を暗記するだけの地理の時間を、粘土で

ヨーロッパ地図を作る作業で置き換え生徒の関心を惹くことに成功したドロシーは、歴史の時間でも大きな壁紙に年代チャートを描き込む作業を始める。“The children were even fonder of the chart than of the contour map. They always, Dorothy found, showed more intelligence when it was a question of *making* something instead of merely leaning” (222; emphasis in original). このような観察は、受動的に現在に隷属するばかりの生徒たちを、歴史を作り上げる「積極的自由」へと向けて解放しようという企図を表している。この野心は結局親たちと学校経営者の非難を受けて挫折してしまうのだが、興味深いのは第五部で故郷に帰ったドロシーが、歴史野外劇の準備に没頭している点である。そもそも彼女は教会の慢性資金不足を補うため様々なチャリティー企画を主催せねばならず、失踪直前に準備していた日曜学校の『チャールズ1世』上演もその一環であった(59)。だが、“beginning with Julius Caesar and ending with the Duke of Wellington” (290)、という彼女の新しい計画が以前の演劇と異なる点は、「かつらの必要がなくなる」という奇妙にも即物的理由でチャールズ2世(王政復古)を省き cromwell だけを登場させる、という国教会の伝統から見れば「革命的」な案にも見られるだろう。4月23日、聖ジョージの日に予定されるこの野外劇は、比較的民衆的かつ民衆的なのである。

だがこの小説の最後でドロシーが企画する野外劇は、どれだけラディカルなもの、あるいはオリジナルなものか評価できるのだろうか。1934年の『芸術の無い奴ら』においてウィンダム・ルイスは現状を批判的に診断しながら「歴史の終わり、そして歴史野外劇の始まり」を宣告している<sup>6</sup>。だが、ジェド・エステイが論じるころでは、こうした野外劇の流行はすでに1900年代から英国各地で始まっていた。この流行現象は海外での植民地獲得競争の激化による帝國的拡張の停滞と大戦以降の退潮に伴って登場した小英国主義に重ね合わせて理解することができるだろう。大規模な参加型の催しとして当時人気を博したこの野外劇のイデオロギー性は、そこで表象される歴史が限定的で、産業革命はおろか植民地と帝国の現代史がまるで忘却されたかのように省略される点に明らかである。典型的な野外劇はローマ時代から革命期まで、そして cromwell 的篡奪者への民衆の蜂起で幕を降ろすのが普通だったという。エステイの批判では、このような野外劇では「歴史はヘリテージに置き換えられ、〈仮装服を着込んだ記憶喪失〉に還元されてしまう。」この点でさらに興味深いのはこの野外劇の流行が1930年代には民衆レヴェルのみならず、通常は孤立した芸術家像に当てはまるモダニストたちをも巻き込んで展開したという事実である。T. S. エリオットの『岩』と E. M. フォスターの『アビンジャー野外劇』が同じ1934年初演(『牧師の娘』の1年前)。ヴァージニア・ウルフの遺作である『幕間』(1941)でも、物語は1939年6月のとある一日の野外劇上演を軸に進展する。エステイはこうした作品についても「仮装服を着込んだ記憶喪失として大衆化された歴史 (“history popularised as amnesia in fancy dress”）」という論理は温存されている、としている<sup>7</sup>。

こうした野外劇を小規模共同体の紐帯を再構築する試みとして考えると、1920年代を通じて文化の商業化・商品化そして階層化(ハイ・ロー・ミドル)と格闘し疎外を余儀なくされていたモダニストたちにとってこの流行が持っていた魅力は想像に難くない。だがたとえば、ウルフの『幕間』では『牧師の娘』のドロシーと同様、上演の担い手となるのは社会的に周縁化された独身女性(spinster/old maid)であるミス・ラ・トロブである。物語化された上演として『幕間』は上演者と観衆との一体感ではなく、むしろ絶え間ない齟齬・摩擦を記録している。通常の野外劇の歴史年代を超えて、ヴィクトリア朝、さらにひび割れた鏡を観衆に向けることで反省的に「現在」をも表象しようとする実験的な試みは、『幕間』が野外劇ジャンルの「記憶喪失」的な論理に抵抗する作品である事を示しているだろう<sup>8</sup>。野外劇そのものではなく、それにまつわる物語という点で『牧師の娘』はウルフの作品と強い親和性を持っている。だが英国守護聖人の日に上演が予定されている点、ウェリントン登場によりナポレオンのフランス軍に勝利する結末、そしてドロシーの上演に向けた没我的な努力は、ナショナリズム的なジャンルの因襲に対して彼女の野外劇が皮肉の牙を持たないことを予感させる。それでもなお重要なのは小説が上演準備の途中で終わり、国民的な歴史表象の主題が未完結のまま放棄されている事実である。この主題は小説にとってはあくまで枠組

みに留まり、上演の担い手だったドロシーはその中心で記憶を失い浮浪者の世界へさまよい出す。この小説の皮肉は、記憶喪失が野外劇の代わりに『乞食オペラ』めいた演劇へと私たちを導いてゆくことにあるのだ。

### 3.

だが、しばしば物語の仕掛けとして説得力がないとして批判されてきたドロシーの突然の記憶喪失と失踪をどのように理解することができるだろうか。第二部の冒頭で突如眼を覚まし、自我も言葉も身体感覚をも喪失した段階から徐々に回復する彼女の意識の描写(85-7)は現象学的とも言えるもので、それだけでも実験的価値があるように思われるが、小説はすぐ後でやや説明がましい段落を挿入している。

The thing that had happened to her was commonplace enough—almost every week one reads in the newspaper of a similar case. A man disappears from home, is lost sight of for days or weeks, and presently fetches up at a police station or in a hospital, with no notion of who he is or where he has come from. As a rule it is impossible to tell how he has spent the intervening time; he has been wandering, presumably, in some hypnotic or somnambulistic state in which he has nevertheless been able to pass for normal (93-4).

DSM-IV-TRの基準に従えばこうした症例は「解離性遁走 (dissociative fugue)」と診断できる。この症例の主要特徴は記憶喪失に伴う突然の失踪と、自己同一性の混乱、もしくは新たな同一性の仮形成にある<sup>10</sup>。面白いことに、イアン・ハッキングはこの「遁走」という診断が特定の時代と場所、特殊な諸条件から成る「環境的適所 (ecological niche)」においてしか成立しない点で、社会構築された「一時的な病気」であると論じている。たとえば初めてこの症例が「発見」されたのは1887年フランス、ボルドーにおいてだったが、この診断はその後20年近くにわたりフランス各地、ドイツ、さらにはロシアまで飛び火するかのよう多発する一方、同時期アメリカと英国ではほとんど症例報告が見られなかった(この流行は第一次大戦以前までに下火になっている)。「遁走」患者の来歴から診断の医学的・社会史的脈までを分析することで、ハッキングは適所条件として「文化的両極性」と「解放」可能性を抽出している。「遁走」行為は、当時のフランス社会での大衆化された旅行ブームの魅力を肯定軸、深刻化する浮浪者問題を否定軸にする両極性の中に置かれる。多くの「遁走」患者が閉塞的の日常に苦しむ下層中産階級の男性であった事実を考慮すれば、この診断は、旅行をする余裕はないが浮浪者にもなりえない彼らにある種の解放をもたらす装置だったことが分かる。フランスでは19世紀後半以降浮浪は厳罰によって厳しく管理されていた一方、当時のアメリカや英国では広大なフロンティアや植民地が潜在的浮浪人口の吸収装置として働いたので、厳格な国内統制の必要がなかった<sup>11</sup>。このように「遁走」の可能性の条件はそもそも問題としての浮浪によって構成されている。

しかしだとすると何故、世紀末の英国には不在だったはずの「遁走」症例が突如1935年、オーウェルの作品中に出現するのだろうか。まず認識せねばならないのは、欧州大陸では否定軸に置かれる浮浪が、英国の伝統文化では逆の評価を受けてきたという事実である。まさにロイ・ポーターも指摘するように、「浮浪者」表象は英国性神話の一部を成してきた。学校教師や警察官のカリカチュアが滑稽だが慈悲深くもある権威を象徴する一方で、浮浪者は逃れ去る「消極的自由」を表象する<sup>12</sup>。このような神話は浮浪やホームレス生活の現実の苦難を隠蔽する点で根本的に問題である。だが、M. A. クロウザーが論じるように、浮浪者を数え上げ施設に収容しさらに強制的に労働力化しようとする公権力の社会政策に対し、民衆的／文学的伝統は主人・義務・金銭を巡る気苦勞からの開放としての浮浪者像を根強く謳いあげ讃え続けてい

た<sup>13</sup>。19世紀初頭のワーズワースのロマン主義の革新は、山野を「歩行の詩学」の対象として開拓した点にこそあり、その延長線上に詩人と先行する浮浪者表象との緊張を孕んだ出会いを「自由の擬態」として演出した<sup>14</sup>。だが、浮浪者像が詩人／芸術家像といつしか重ね合わされ決定的にロマン化されるのは19世紀の中盤以降である。一時カルト的人気を博したジョージ・ボローの『ラヴェングロー（言語学者）』出版が1851年、マシュー・アーノルドの「学者ジプシー」執筆はその2年後。19世紀後半にはR・L・ステイヴンソンによる「浮浪者」という詩もある。20世紀初頭エドワード朝にはこうしたロマン化が一定の頂点に達した<sup>15</sup>。詩人W. H. デイヴィスがアメリカでの浮浪者生活の実体験を元に自伝を出版したのは1908年。同時期、画家オーガスタス・ジョンは、みずから組織したキャラバンを駆ってエキゾチックなジプシー観の流行の中心に乗り込んでいた。フォード・マドックス・フォードの友人でもあるダグラス・ゴールドリング編集による雑誌『放浪者 (the Tramp)』のような試みも、この流行の一部と見なせるだろう<sup>16</sup>。

だが同時期、長期的な不況による浮浪者・ホームレスの増加は大英帝国の国内社会政策に継続的な問題を投げかけていた。1906年の政府報告は、イングランドとウェールズ全域で景気の良い時期で3～4万人、悪い時期では7～8万人の浮浪者数を推定している。ボーア戦争や第一次世界大戦にともなう労働構造の変化はこの人数を一時的に減少させているが大戦終結後の帰還兵の流入以降、浮浪者数統計は急激な上昇カーブを描いている<sup>17</sup>。これに対して、政府の対応は19世紀前半の貧民法と浮浪法によって方向づけられた抑止政策に留まるばかりで、社会統制的な見地から犯罪化するにせよ労働倫理的な観点から病理化するにせよ、効果的な対処法を打ち出すことはおろか、問題の的確で個別的な把握すらできないままであったと言える<sup>18</sup>。こうした状況下での浮浪者層の表象不可能性、その「闇」としての性格は、ジャーナリスティックな探求、偽装した潜入者による「内側からの」報告という奇妙にも民族誌的なサブ・ジャンルを生み出した。私的組織による社会底辺の調査は19世紀中盤のヘンリー・メイヒュー以降あるが、潜入による報告の試みは19世紀後半以降ジャーナリスト、牧師やその妻、小説家、社会改良家などにより繰り返し行なわれている。アメリカから来たジャック・ロンドンが浮浪者に身をやつしイースト・エンドの潜入記『どん底の人々』(1903)を書くまでには、「異界への冒険」というジェスチャーはすでに定式化されていたと言える。このような試みは浮浪生活の苦難（特に臨時収容所の悲惨な環境）を具体的に描写する点でロマン化に抗うものではあるが、その探究をドラマチックな冒険に仕立てあげる傾向は、結果としてその視野を狭めてしまう<sup>19</sup>。

英領ビルマでの5年の勤務の後帰国したエリック・アーサー・ブレアが、帝国でのキャリアに見切りをつけて著述家を目指す決心を固めたのは1927年のことである。2年ほどのパリ滞在前後から断続的に浮浪生活に潜入し観察を繰り返した彼の行動は、先例の定式を忠実になぞっていたと言える。1931年には1ヶ月ほどにわたり、ロンドンを出発点にトラファルガー広場での一夜を経てKent州でのホップ摘み作業へと至るコースをたどっている。後に『牧師の娘』の素材として利用されるこの経験を除いて、この時期の生活を虚構的に再構成したものが1933年に初めてジョージ・オーウェル名義で出版された『パリ・ロンドンどん底生活』である<sup>20</sup>。実体験の断続性を無視して時系列的統一を構築したことには物語化への欲望が見られるかもしれない。だが、前半のパリ編が滑稽なエピソードに彩られ、読み物的な楽しみに満ちているその一方、後半のロンドン編では即物的な描写がルポルタージュ的な観察と交互して現れる、というようなアンバランスな対照は英国の浮浪者たちへのオーウェルの関心が、少なくとも安易なロマン化とは遠いものであったことを示すだろう。たとえば次のようなコメント、“A tramp tramps, not because he likes it, but for the same reason as a car keeps to the left; because there happens to be a law compelling him to do so.”「なぜ浮浪は存在するのか？」と根本的な疑問を投げかけつつ、好きだからでも楽だからでも、まして「遊牧民への退行 (“nomadic atavism”）」でもない、と否定を重ねた後に提出されるこの急落法 (bathos) 的な解答は、ロマン化を蒙りがちな神秘性を浮浪者像から剥奪すると同時に、その社会構築性を暴露する鋭さを持っている<sup>21</sup>。

浮浪の実態は同じ臨時収容所に数日以上滞るを禁ずる法制によって縛られており、この意味で浮浪は「移動の自由」から「移動の義務（強制）」への変質を体現している。ただ、この点を改めて念頭に置かならオーウェルの行動はやはり奇妙に思えるかもしれない。当時の彼には自活するだけの資力は無かったが、頼るべき親戚も友人たちもおり、浮浪への参加はあくまで自由意志による行為だったのである。ルポルタージュを書くという明白な目的を除けば、この点についての率直な告白は4年後の『ウィガン波止場への道』に記されている。“[Tramping with other tramps,] I was very happy. Here I was, among ‘the lowest of the low,’ at the bedrock of the Western world! The class-bar was down, or seemed to be down. And down there in the squalid and, as a matter of fact, horribly boring sub-world of the tramp I had a feeling of release, of adventure, which seemed absurd when I look back, but which was sufficiently vivid at the time.”<sup>22</sup> ここでまさに自ら認めているように「不条理」なのは、失業と貧困そして強制の世界に下降することが、それでもなお「解放」として感覚されたという事実にある。「冒険」という言葉は、結局は彼が仮装による社会探究の定式に完全に忠実であったことを回顧的に明かしている。帝国の警官として被植民者との関係に自我を厳しく痛めつけられたオーウェルにとって、「西欧世界」で「階級の壁」を越える試みは置換された贖罪としての意味を持っていた<sup>23</sup>。

『パリ・ロンドン』から『ウィガン波止場』へと至る4年の間に見られるこの反省過程は、オーウェルの浮浪者層への認識の変化を物語っている。彼の視点はそもそもロマン化された浮浪の伝統からは切断されていたが、それでもなお「警官から浮浪者へ」という（文字通り仮装による）移動は強制の世界への探訪を自由への解放として誤認させるに充分だった。しかし、回顧的な視点はこの「解放」をカッコに括ることになる。おそらくこの2つの作品の間に位置する『牧師の娘』においても同様な反省が働いていると考えることができるだろう。第五部でドロシーの帰郷に同伴したウォーバートンは記憶喪失を解説して“only a device, unconsciously used, to escape from an impossible situation” (274) と述べているが、まさにドロシーの「遁走」は閉塞的な日常からの解放であると同時に、そこで得られた自由は記憶喪失に基づいている点であくまで限定を加えられている。1930年の英国内での浮浪者問題の可視化は、不況時の失業問題のみならず以前は「余剰」人口の吸収装置として機能した植民地の帝國的地平の退縮とも連動している。1941年「ライオンと一角獣」の中でオーウェルは、第一次大戦後、電信網の発達による中央集権化が植民地現地官僚の自由と創意を奪い、結果的に帝国中産階級の衰退を招いた事実を指摘しているが、これは1927年に帰英したオーウェル自身が現場で身をもって実感した閉塞だったはずだ。そのオーウェルにとってもドロシーと同様、英国の浮浪者たちとの接触は「解放」、つまり「遁走」的な自由の経験だった<sup>24</sup>。この視点からは『牧師の娘』における浮浪は、自由主義の英国的／帝國的伝統の命運に関するオーウェルの省察として読まれうるだろう。

#### 4.

ではこの小説では浮浪は実際どのように表象されているだろうか。第二部、記憶を失ったドロシーは、ノビー率いる浮浪者たちに誘われるままにロンドンからケントに向けて歩き出す。この旅の描写はオーウェル特有の身体感覚によるきわめてリアリスティックなものである。浮浪の現実“hunger, squalor and fatigue” (94) の悪夢であると描かれている。ドロシーがジャガイモの入った袋を担ぐと、粗い生地が彼女の肌に喰い込み血が流れ出す。歩き続けるにつれノビーの古靴は擦り切れ裸足同然、そのせいで足を痛めてしまう (98)。だが、ケントがドロシーの生まれ故郷であることを考えれば (17, 92)、この浮浪の旅は始原への廻行といった象徴的な解釈にも開かれている<sup>25</sup>。ホップ摘み作業の描写はこの季節労働の悲惨さを暴露しているが、同時にドロシーがそこに奇妙な幸福を見出している点は示唆的である。

The work took hold of you and absorbed you. It was stupid work, mechanical, exhausting and every day

more painful to the hands, and yet you never wearied of it; when the weather was fine and the hops were good you had the feeling that you could go on picking for ever and for ever. It gave you a physical joy, a warm satisfied feeling inside you, to stand there hour after hour, tearing off the heavy clusters and watching the pale-green pile grow higher and higher in your bin, every bushel another twopence in your pocket. The sun burned down upon you, baking you brown, and the bitter, never-palling scent, like a wind from oceans of cool beer, flowed into your nostrils and refreshed you (113-4).

好天下の畑での単純労働は意識を身体に没入させ、この過程にドロシーは無意識的な充足、“an almost beast-like heaviness” (121) を感じている。このような無意識的な身体性はサフォークでの意識的欺瞞に満ちた生活とは好対照であると言えるだろう。デイヴィッド・ジャーヴェイスは、オーウェルは無意識的な文化に真の英国性を見出すことを試みたと指摘しているが、屋外での単純労働によって得られた充足感は、まさにこうしたオーウェル的な田園詩性 (pastoralism) の表出、つかの間のユートピア像として理解できる<sup>26</sup>。だが、こうした「動物的」幸福は後に驚くべき反転に従属する。

第三部でドロシーはホップ摘みが終わった後にロンドンに戻るが職探しに失敗し、手持ちの金も使い尽くしてついにトラファルガー広場でホームレス状態に陥る。ここで描写のモードは突然表現主義的な戯曲形式にシフトする。この実験へのジョイスの影響は出版当初から指摘されてきたが、あまり良い評価を受けてきたとは言えない。たとえばV. S. プリチュットは当時の書評で社会派リアリズムの可能性が安易な模倣によって台無しになった、と否定的な評価を下している<sup>27</sup>。しかしレイモンド・ウィリアムズも主張するように、オーウェルのジョイスへの関心はより真剣なものとして考察されるべきだろう<sup>28</sup>。ここでオーウェルが利用しているのは『ユリシーズ』第15挿話の「キルケ」、ダブリンの娼婦街の一夜を描いた部分であり、浮浪者と娼婦そして警察だけが跳梁する夜のトラファルガー広場と内容的に通じ合う。以下の描写を読む上で、私たちは『オデュッセイア』でのキルケが航海者たちを動物に変える魔女である事実を思い起こすべきだろう。

*Charlie:* ‘That’s the stuff? Shove in! Shift yourself, Daddy, and make room for my little sit-me-down. Get one atop of each other. That’s right. Never mind the chats. Jam together like pilchards in a perishing tin.’

*Mrs Wayne:* ‘Here, I didn’t ask you to sit on my lap, young man!’

*Ginger:* ‘Sit on mine, then, mother—’sall the same. What o! First bit of stuff I’ve ’ad my arm round since Easter.’

(They pile themselves in a monstrous shapeless clot, men and women clinging indiscriminately together, like a bunch of toads at spawning time. There is a writhing movement as the heap settles down, and a sour stench of clothes diffuses itself [...]) (174-5; ellipsis mine).

深夜のトラファルガー広場で厳寒のなか満足に眠ることもできない浮浪者たちは、少しでも暖を取るために「腐った缶に群がる鰯」の如く、あるいは「繁殖期の蛙の群れ」のように互いに抱き合い、重なり合い、「怪物的な無定形の塊」になる。田園詩的な動物性が、ここではグロテスクな非一人間化としての動物化へと反転する<sup>29</sup>。こうした極限的な悲惨はやがてドロシーの幻想とも取れる黒ミサの場面と怪物の出現 (176) へとつながってゆく。ジョイスの「キルケ」における戯曲形式は、植民地支配下の社会が猜疑心と不安、

そして貧困によって虚飾と見せかけのまさに演劇的状況へと変貌する様を表現しているが、同時にそのような演技的側面の誇張は逆説的にも内面に隠れた幻想の行為化 (acting out) へと道を開く。ここでの動物化はそうした幻想が無意識に抑圧された身体的な欲望であるという観点から理解できる<sup>30</sup>。このように『ユリシーズ』がモダニズムの単なる「芸術品」ではなく植民地都市ダブリンを描いた作品であることを考えれば、オーウェルは「キルケ」を借用することで大英帝国の中心に似たような支配の構図を描き出そうとしていると言えるだろう<sup>31</sup>。1940年のエッセイ「鯨の腹のなかで」においてジョイスとヘンリー・ミラーを比較しつつ、オーウェルは次のように彼らの共通の特徴を記述している。“[They have] chosen to drop the Geneva language of the ordinary novel and drag the *real-politik* of the inner mind into the open.”これを敷衍して言えば、この手法により明るみに出される内面の「現実政治」は帝国主義的な支配—被支配関係によって規定されているのだ<sup>32</sup>。

サフォークの田舎町からケント、そしてロンドンへと至るドロシーの浮浪の旅はこうして異国のような英国を見出す。家郷 (home) の代わりにその不在 (homelessness) を、そして小英国主義的な歴史を表象する野外劇の代わりに帝国の中心に植民地的悲慘の場面を演出する小説として、私たちは『牧師の娘』の批判力を評価することができるだろう。ステイーブン・イングルはオーウェルの反帝国主義を説明するなかで、彼はビルマでの帝国主義の実体験から英国内や全体主義国家の支配—被支配構造の普遍的なモデルを抽出した、と主張している<sup>33</sup>。1937年に、帰英当時の自らの政治認識を振り返ってオーウェルは以下のように言っている。“I now realised that there was no need to go as far as Burma to find tyranny and exploitation. Here in England, down under one's own feet, were the submerged working class, suffering miseries which in their different way were as bad as any an oriental ever knows.”ここでオーウェルはビルマ人被植民者と英国労働者階級を“symbolic victims of injustice”として同一視している<sup>34</sup>。『牧師の娘』でのジョイス転用を動機づけているのも、英国／帝国という地理的拮据によって不可視化した全体性を再度認識上にもたらそうという、同様の努力であったのかもしれない。しかし、もしもこれがオーウェルの反帝国主義の核心であるとするならば留保する必要がある。「象徴的被害者」として異なる立場の者を同一視する視点で、帝国主義の問題と階級の問題の具体的差異を把握することができるだろうか。ビルマと英国では状況が異なる、まさにダブリンとロンドンが違うように。この過程が被植民者と労働者の交換可能性といった単純なものであるとしたら、オーウェルの姿勢は植民地問題から英国内の問題へと眼を逸らすものになる危険がある<sup>35</sup>。同様に、人間—動物の反転可能性というテーマにも曖昧性がある。1946年の短いエッセイのなかで「繁殖期の蛙の群れ」——浮浪者の動物化を表現するグロテスクな直喩——は文字通りの描写となり、春の再来と自然を讀めるオーウェルの田園詩のセット・ピースと化している<sup>36</sup>。

1930年代のオーウェルの諸小説がいずれも不人気であることの理由の一つは、主人公を困難で悲惨な状況に送り込むことで社会問題を力強く描写しながらも、結局は登場人物たちの弱い受動性のために解決を提示することなく終わる、という共通のパターンに見られる悲観的な結末が静寂主義的な現状受容を勧めているようにも読めるためである。たしかに、『牧師の娘』でもドロシーは浮浪の経験によって信仰を失いながら結局は帰郷を選択することで、不完全な現実を受け入れているように読める。しかしトラファルガー広場に留まることがその対案、問題の解決とはならないこともまた明白であろう。ホームとホームレスの弁証法を矛盾のまま宙吊りにするこの小説の結末は、結局のところ全体性の構築を断念している。「ジョージ・オーウェルの著作では、英国への忠誠が帝國的暴力の認識によって掘り崩されており、ネーションと帝国の諸イデオロギーへの屈服と抵抗を同時に象徴している」とローズマリー・マランゴリー・ジョージは指摘している<sup>37</sup>。この小説の断片性は、まさにこうした小説家自身のジレンマをありありと表現していると言えるだろう。そこで提出された問題の規模と複雑さを思えばこの完結性の不在は大きな弱点でもあり、同時に一種の誠実さの表現でもあるのかもしれない。



## 5.

私たちは、ジョージ・オーウェルを想像の共同体としての英国の20世紀の主要な神話製作者の一人と見なすことができる。こうした印象は主に、第二次大戦中の興奮のもとで書かれたパンフレット「ライオンと一角獣」などの著作に多くを負っている。そこでの彼の意図は、自発的な愛国心と大衆文化を非党派的で本来的に民衆的な社会主義を構築するために動員しようというものであったが、世紀後半の冷戦構造に即した読み替えを経て、オーウェルの英国性をめぐる提案は批判者と擁護者のあいだで苦く継続的な論争を招いてきた<sup>38</sup>。グローバリゼーションとポストコロニアリズムが拮抗する現在においてオーウェルのプログラムは、特にキャリル・フィリップスのように移民の背景を持つ作家からの痛烈な批判に開かれている<sup>39</sup>。そうした時であるからこそ、かつての「英国的なリアリズム作家」としてのオーウェル像を再検証し、帝国と植民地との間、そしてモダニズムとリアリズムとの間に宙吊りになった作家としてオーウェルを再読することは一定の重要性を持つように思える。本論はそうした読解のための準備作業である。

### 注

<sup>1</sup> このような見解を補強するように思われるのはオーウェル自身の後の自作の評価である。1945年のノートで彼はこの小説を「馬鹿げた金稼ぎ用の作品」と断じ、死後の再版を禁じている。George Orwell, "Notes for My Literary Executor," *The Complete Works of George Orwell: Volume Seven*, ed. Peter Davison (London: Secker & Warburg, 1998), 113-5.

<sup>2</sup> Bernard Crick, *George Orwell: A Life* (London: Penguin, 1980, new ed. 1992), 256-60. オーウェルによるジョイス模倣に関してクリックはシーン・オケイシーによる痛烈な批判を引用している。"Orwell had as much chance of reaching the stature of Joyce as a tit has of reaching that of an eagle" (258).

<sup>3</sup> D. J. Taylor, *Orwell: The Life* (London: Vintage, 2004), 137-41.

<sup>4</sup> 以下では一貫して英国、ならびに英国性という訳語を用いるが、オーウェルの作品中における単語としてはEnglandならびにEnglishnessを想定している。連合王国の成立から昨今のデヴォリューションまでの歴史的な経緯を踏まえれば「イングランド」という一地域名で英諸島の他地域を包括してしまうのは単純な誤用なのだが、たとえば第二次世界大戦中の「ライオンと一角獣」でオーウェルがEnglishnessを国民意識統合の為に用いていた事実は、彼のなかで「イングランド性＝英国性」という政治的な等号が成立していたことを示唆しているように思われる。この点を考慮に入れるために本論においてはあえてイングランド、イングランド性というより正確な訳語は採用しなかった。

<sup>5</sup> George Orwell, *A Clergyman's Daughter* (London: Penguin, 1990), 1. 以下引用箇所は本文中にカッコつき数字で示す。なおオーウェルの1930年代の小説にはすべて晶文社から邦訳が刊行されているが、物理的事情のため参照できなかった。

<sup>6</sup> Wyndham Lewis, *Men Without Art* (1934; Santa Rosa: Black Sparrow Press, 1987), 165.

<sup>7</sup> Jed Esty, *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England* (Princeton: Princeton University Press, 2004), esp. Chapter 2, 54-107. エスティの「記憶喪失」という用語は、直接的にはパトリック・ライトによる1980年代英国でのヘリテージ産業台頭に向けた批判から取られている。エスティの著作の要領を得た要約としては、河野真太郎「メタ・メタカルチャーとモダニズムの緩慢な死」『ウルフ研究』第21号（2004年9月）68-83頁を参照。

<sup>8</sup> Virginia Woolf, *Between the Acts* (London: Penguin, 1992), 108-11. 迫り来る第二次大戦の予感が複雑な屈折を招いているのは事実だが、この小説でも、ウルフは他の全作品を通じて見られる集団的なものへの両価的な感情を保持しているように思われる。

<sup>9</sup> Cf. Terry Eagleton, *Exiles and Émigrés: Studies in Modern Literature* (London: Chatto & Windus, 1970), esp. Chapter 3, 71-107, 91.

<sup>10</sup> *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*, 4th Edition, Text Revision (Washington, DC: American Psychiatric Association, 2000), 523-6.

<sup>11</sup> Ian Hacking, *Mad Travellers: Reflections on the Reality of Transient Mental Illnesses* (London: Free Association Books, 1999), esp. Chapter 3, 51-79. 19世紀後半、フランスとドイツには浮浪の罪で逮捕されると流刑地送りになる法制が存在していたが、英国では同様の法制が一次大戦直前に検討されたものの成立しなかった。

<sup>12</sup> "Introduction," *Myths of the English*, ed. Roy Porter (Cambridge: Polity, 1992): 1-11. この最も有名な例としてはチャーリー・チャップリンの映画の主人公が挙げられる。

<sup>13</sup> M. A. Crowther, "The Tramp," *ibid.*, 91-113.

<sup>14</sup> Cheleste Langan, *Romantic Vagrancy: Wordsworth and the Simulation of Freedom* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995). Also see, Anne D. Wallace, *Walking, Literature, and English Culture: The Origins and Uses of Peripatetic in the Nineteenth Century* (Oxford: Clarendon Press, 1993). Rebecca Solnitが示したように、「歩行の詩学」は主体（個人から集団へ）と対象（山野から都心部へ）、そしてその政治的含意をも常に変えながら現在まで継続している。Solnit, *Wanderlust: A History of Walking* (London: Verso, 2001).

<sup>15</sup> Crowther, *op. cit.*, 105-8.

<sup>16</sup> W. H. Davies, *The Autobiography of Super-Tramp* (1908; Oxford: OUP Paperback, 1980). この自伝にはG・B・ショーが熱烈な前書きを寄せている。オーガスタス・ジョンのジブシー熱についてはLisa Tickner, *Modern Life & Modern Subject: British Art in the Early Twentieth Century* (New Haven and London: Yale University Press, 2000), 47-77. このような潮流への初期ウィングダム・ルイスによる諷刺は後の彼の反自由主義／反ロマン主義的姿勢の発達を考えると興味深い。最初期の短編の一つ"Le Père Français (A Full-Length Portrait of a Tramp)" (1910) はゴールドリングの雑誌に掲載されたが、衝動的に擬態を演じる不自由な浮浪者を描き出している。Wyndham Lewis, *The Complete Wild Body* (Santa Barbara: Black Sparrow Press, 1982), 277-83. また小説第一作『ター』(1918)のブッチャーはジョンの皮肉な肖像であると指摘されている。Tarr: *The 1918 Version* (Santa Rosa: Black Sparrow Press, 1990), 36-44.

<sup>17</sup> M. A. Crowther, *op. cit.*, 98 and Crowther, *The Workhouse System 1834-1929* (Athens, Georgia: The University of Georgia Press, 1981), 247-266にも指摘されている通り、調査手続きの未発達と、そもそも移動性の浮浪者層を数値化する難しさのために、この統計資料は不十分なものである。

<sup>18</sup> 包括的な批判としてはTim Cook (ed), *Vagrancy: Some New Perspectives* (London: Academic Press, 1979)を参照。関連した問題には、初期の福祉国家の試みの一部としてのハウジング政策がありオーウェルも『ウィガン波止場への道』(1937)で北部工業地帯を例に取り上げて論じている。

<sup>19</sup> Peter Beresford, "The Public Presentation of Vagrancy," Tim Cook, *ibid.*, 141-65, esp. 144-7. ベレスフォードは「社会探究者」の伝統に見られるエキゾチシズムは結局のところ社会統制的な観点と共犯的である、として厳しく批判している。

<sup>20</sup> この時期の伝記的事実についてはCrick, *op. cit.*, 176-219; Taylor, *op. cit.*, 87-127.

<sup>21</sup> Orwell, *Down and Out in Paris and London in Orwell and the Dispossessed* (London: Penguin, 2001): 65-220, 211-2. 『パリ・ロンドン放浪記』小野寺健訳（岩波書店、1987年）、270頁。浮浪を“Nomadism”の観点から退行現象と見なす学説は1915年アメリカのCharles Davenportによって提起されている。Hacking, *op. cit.*, 65-6.

<sup>22</sup> Orwell, *The Road to Wigan Pier in Orwell's England* (London: Penguin, 2001): 50-261, 161. 『ウィガン波止場への道』土屋宏之・上野勇訳（ちくま学芸文庫、1996）204頁。

<sup>23</sup> この行動の自己破壊的な下降衝動の側面は『葉蘭をそよがせよ』(1936)の主人公ゴードン・コムストック（この名前自体そもそもギッシング的であるが）の心理に投影されている。Keep the Aspidistra Flying (London: Penguin, 1989), 227.

<sup>24</sup> Orwell, "The Lion and the Unicorn," *Essays* (London: Penguin, 2000): 138-88, 154. 『オーウェル評論集4：ライオンと一角獣』川端康雄編（平凡社1995）43-4頁。1939年の『空気を吸いに』においては「遁走」の可能性が“the old gag about losing my memory”としてさらに周縁的な位置に追いやられている点は、オーウェルの思索の発展を考える上で示唆的である。Coming Up for Air (London: Penguin, 1990), 247.

<sup>25</sup> Richard I. Smyer, "A Clergyman's Daughter: the Flight from History," *Modern Fiction Studies* 21 (1975): 31-47.

<sup>26</sup> David Gervais, *Literary Englands: Versions of 'Englishness' in Modern Writing* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), 178. オーウェルにおける田園詩性についてはRaymond Williams, *The Country and the City* (London: Chatto & Windus, 1973), 275. ちなみにケント地方での夏のホップ摘み労働は伝統的に浮浪者やジブシー、ロンドンのスラム街の住人たちの年中行事として定着していたが、1938年のCicely Hamiltonの観察では、摘み取り機械の導入によってこの季節労働の需要はすでに減退傾向にあった。これを踏まえると、オーウェルの労働描写は期せずしてノスタルジーを帯びているとも言えるかもしれない。Hamilton, *Modern England: As Seen by an Englishwoman* (London: Dent, 1938), 6.

<sup>27</sup> *George Orwell: the Critical Heritage*, ed. Jeffrey Meyers (London: Routledge & Kegan Paul, 1975), 59-60.

<sup>28</sup> Raymond Williams, *Orwell* (London: Fontana, 1971), 44-53. ただ、ウィリアムズは「普通の男」オーウェルというペルソナ形成の過程でブルーム像が持った重要性を指摘するに留まっている。『ユリシーズ』における言語媒体そのものへの関心が現実社会への受動性と受容という「芸術」のイデオロギーから派生している点だけを指摘していることでのウィリアムズのジョイス理解は十分なものとは言い難い。

<sup>29</sup> 人間と動物の反転可能性は最初期の『ビルマの日々』から後期の『動物農場』に至るまでオーウェルの一貫したテーマの一つである。See, John V. Knapp, "Dance to a Creepy Minuet: Orwell's *Burmese Days*, Precursor of *Animal Farm*," *Modern Fiction Studies* 21 (1975): 11-30; Douglas Kerr, "Orwell, Animals, and the East," *Essays in Criticism: A Quarterly Journal* 49:3, (1999): 234-55. またこのテーマの興味深い変奏は旅行スケッチ「マラケシュ」(1939)に見られる。

<sup>30</sup> 「キルケ」での動物化は直喩としてだけでなく、隠喩的な変身としても現れている。たとえばビーグル犬になったディグナムの亡霊(385)、ロバの耳をつけたブルーム(405)、半人半鳥のようなヴィラグ(420-6)など。James Joyce, *Ulysses* (London: the Bodley Head, 1986). この他方、ジョイスの演技的な見せかけへの関心は詳細な服装描写に見られる。

<sup>31</sup> 『ユリシーズ』、特に「キルケ」挿話に見られる植民地性については以下も参照。Enda Duffy, *The Subaltern Ulysses* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1994), 130-164; Andrew Gibson, *Joyce's Revenge: History, Politics, and Aesthetics in Ulysses* (Oxford: Oxford University Press, 2002), 183-206.

<sup>32</sup> "Inside the Whale," *Essays*, 101-133, 104. emphasis in original 『オーウェル評論集1 鯨の腹のなかで』川端康雄編(平凡社1995)17頁。こうした解釈が妥当であるように思えるのは、オーウェル自身が「象を撃つ」などのエッセイのなかで植民地支配の及ぼす内面への破壊的影響を記述しているためである。似たような背景を持つレナード・ウルフも植民地行政官としての経験が彼に「政治的統合失調症」をもたらしたと告白している。Also see, Ashis Nandy, *The Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self under Colonialism* (Oxford: Oxford University Press, 1983), 39-42. 異なる観点からだが、リチャード・ローティもオーウェルは社会の権力関係から切り離された内面的自由を想定していない、と指摘している。Richard Rorty, *Contingency, Irony, and Solidarity* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989), 176.

<sup>33</sup> Stephen Ingle, "The Anti-Imperialism of George Orwell," *George Orwell: New Casebooks*, ed. Graham Holderness, et al (London: Macmillan, 1998): 228-48.

<sup>34</sup> Orwell, *The Road to Wigan Pier*, 159. 邦訳199頁。

<sup>35</sup> これが実際にはそうではないこと、ただそれでも残る曖昧さは1939年の次のような指摘にも見られるかもしれない。"What we always forget is that the overwhelming bulk of the British proletariat does not live in Britain, but in Asia and Africa." "Review of *Union Now* by Clarence K. Streit," *The Complete Works of George Orwell: Volume Eleven*, ed. Peter Davison (London: Secker & Warburg, 1998): 358-61. 似たような視点からオーウェルの反帝国主義の弱点を衝いた論考としてDouglas Kerr, *George Orwell, Writers and Their Works Series* (Tavistock, Devon: Northcote House, 2003), 19-22.

<sup>36</sup> "Some Thoughts on the Common Toad," *Essays*, 360-3. 『ライオンと一角獣』284-90頁。ただ、この短文の低音部を成すのが第二次大戦後のオーウェルのかすかな絶望感であることを考えると、これを田園的英国の理想化とは取りづらい。

<sup>37</sup> Rosemary Marangoly George, *The Politics of Home: Postcolonial Relocations and Twentieth-Century Fiction* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), 5.

<sup>38</sup> 批判としてはWilliams, *Orwell*, 16-28; Louis Menand, "Honest, Decent, Wrong: the Invention of George Orwell," *The New Yorker*, (Jan 27 2003): 84-91. 擁護としてはMichael Walzer, "George Orwell's England," in Holderness, op. cit, 182-202; Christopher Hitchens, *Orwell's Victory* (London: Penguin, 2002), 103-24. 特にウィリアムズによるオーウェル批判と、政治学者マイケル・ウォルツァーによる反批判は、問題となる議論の要点を押さえる上で有益である。

<sup>39</sup> たとえば以下のようなコメントを参照。"I would argue that whereas George Orwell claimed that 'It needs some very great disaster, such as prolonged subjugation by a foreign enemy, to *destroy* a national culture,' the truth is that it needs some very great fortune such as continual waves of immigration to create a national culture" (emphasis in original). Caryl Phillips, "The Pioneers: Fifty Years of Caribbean Migration to Britain," *A New World Order: Selected Essays* (London: Secker & Warburg, 2001): 264-83, 281.